

## 県立高等学校教育課程課題研究 （産業教育（家庭、看護、福祉））

平成30年に改訂された学習指導要領において、育成を目指す資質・能力が三つの柱で整理され、令和4年度からは観点別学習状況の評価が実施されている。そこで本研究では、生徒が授業で学んだ知識やスキルを活用し、主体的、協働的に取り組むことができるパフォーマンス課題を開発し、「主体的に学習に取り組む態度」を見取るための評価の研究に取り組んだ。また、生徒が主体的、対話的に学習に取り組むことができるよう、ICT機器を積極的に活用した授業を研究した。各教科の研究員の取組を報告する。

＜検索用キーワード＞ 高等学校家庭科、看護科、福祉科 パフォーマンス課題  
ICT機器の活用 評価

### 運営委員長

愛知県立一宮商業高等学校長 朝日 真二（令和5年度）

### 運営副委員長

愛知県立古知野高等学校教頭 川口 永理（令和5年度）

### 運営委員

高等学校教育課課長補佐 服部麻美子（令和5年度）

総合教育センター研究指導主事 服部 浩子（令和5年度主務者）

### 研究員

愛知県立南陽高等学校教諭 楯 芳美（令和5年度）

愛知県立海翔高等学校教諭 岩城 令佳（令和5年度）

愛知県立桃陵高等学校教諭 竹田 奈央（令和5年度）

愛知県立一色高等学校教諭 西村 隆也（令和5年度）

## 1 はじめに

平成30年3月に改訂された高等学校学習指導要領が令和4年度から年次進行で実施されている。高等学校教育課程課題研究（産業教育（家庭、看護、福祉））では、「学習指導要領のねらいを生かすための指導及び評価の方法などの研究とその成果の普及」を目的として取組を継続している。

家庭科、看護科、福祉科は実習を伴う教科であり、新学習指導要領においては、各教科の見方・考え方を働かせた実践的・体験的な学習活動を通して、生活の創造者または職業人として必要な資質・能力を育成することが目標として示された。また、各教科においてどのような資質・能力の育成を目指すのかが、「知識及び技能（技術）」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で整理されている。

このような資質・能力を育むために、生徒が知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考え方を形成したり、問題を見いだして解決策を考える「過程」を重視したりする主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善が求められている。さらに令和3年1月に出された中央教

育審議会答申では、2020年代を通じて実現すべき「令和の日本型学校教育」を担う教師の姿として、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実し、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善につなげるとも示されている。

こうした状況を踏まえて主体的・対話的で深い学びを具現化することができる授業を研究し、総合教育センターのウェブページに公開してきた。これまでの研究過程で研究員から課題として挙げたのが「主体的に学習に取り組む態度」の評価の方法である。そこで令和4年度より「主体的に学習に取り組む態度」を見取ることができるパフォーマンス課題を開発し、その評価の在り方について具体的な方法の研究を行うこととした。パフォーマンス課題に含まれている協働的な学びの姿についても、参考にさせていただきたい。

## 2 研究の目的

これまでの研究成果を基に、各教科の見方・考え方を働かせ、実践的・体験的な学習活動を行うことなどを通じた指導方法を研究する。また、パフォーマンス課題の開発を通して「主体的に学習に取り組む態度」の評価を研究する。さらに、生徒が主体的・協働的に学習に取り組むことができるようICT機器を活用した授業を実施し、そこで得られた知見を学校へ還元する。

## 3 研究の方法

研究員の教科や学科が異なるため、研究自体は個人研究であるが、単元の指導計画、パフォーマンス課題、評価方法・評価基準の検討は研究員全員で行い、検討後に授業実践・報告を行った。また、実践報告を基に課題について全員で協議し、研究の充実を図った。

## 4 研究の内容

### (1) 「子ども文化」における指導方法と評価

社会状況の変化に伴い子育ての形が大きく変わってきている。子どもが保育施設で過ごす時間は多くなり、行政機関や企業が企画する保育に関する活動も増加している。保育に関する専門科目では、子どもについての理解を深め、社会の中で生きて働く「知識及び技能」の習得、未知の状況にも対応できる「思考力、判断力、表現力等」の育成、学びを自らの人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力、人間性等」の涵養が求められている。そこで、地域の保育園やコミュニティ施設へ赴き、地域と協働し多様な他者と関わりながら子どもやその保護者と関わる経験を通して、保育を担う職業人となるきっかけづくりができる機会とした。授業において、手遊び、絵本の読み聞かせ、紙芝居制作などのパフォーマンス課題を取り入れ、個々の状況に合わせた学びと、イベントの企画という他者との関わりの中で地域の子育て支援の多様なニーズに触れさせるようにした。そして、その経験から得たことを生徒自身で言語化し、活動を振り返って改善点を見つけ、次の学習に生かせるよう授業改善を図ることとした。この活動を通して生徒は、子どもの遊びに関する考えや理解を深めることができた。一方で、生徒によって課題完成の理想レベルが異なることから、クラスで目標を事前に共有することで当日の積極性が高まり、振り返りの内容が深まることが分かった。

### (2) 「フードデザイン」における指導方法と評価

家庭の生活に関わる産業には多種多様な商品が存在し、豊かな物質やサービスに支えられて暮らしている私たちは、余りにもあたりまえにこれらを享受しているため、生活に関わる物質やサービスを

提供する人の創意工夫や思いに気付くことが少なくなっている。そこで、実践的・体験的な学習活動としてのパフォーマンス課題を通して、生活の質の向上と社会の発展を担う職業人として必要な資質・能力の育成を目標に、科目「フードデザイン」において、生徒が調理科目の学習で得た知識・技術を総合的に活用し、自らが総合プロデュースした供応食を招待者に提供する実践を「パフォーマンス課題」として取り入れた。そのことにより「求められている結果（目標）」「共有承認できる根拠（評価方法）」「学習経験と指導（授業実践）」を三位一体として行うことができ、評価基準だけでなく評価の方法を明確にした授業実践が可能となった。研究を進めていくと生徒はICT機器をうまく活用し、数多くのレストランやホテルの「供応食」に関する情報収集・分析を行い、その中から地域の特産物や招待客に合いそうな料理を研究し、自分の献立・調理に応用していった。これらをまとめた成果物が「主体的に学習に取り組む態度」の評価基準・評価方法等につながった。また、パワーポイントでの発表資料の打ち合わせや、グループ発表を通じてチームワークやコミュニケーション能力が向上し、生徒の可能性を引き出し、協働的な学びに発展させることができた。

### (3) 「基礎看護技術」における指導方法と評価 —看護過程におけるアセスメントの評価とICTの活用—

学習指導要領では、看護の目標として「看護について体系的・系統的に理解するとともに、関連する基礎的な技術を身に付ける」とある。また、実践的・体験的な学習活動を通して、看護の共通技術を基に基礎的な援助に関する知識と技術を身に付けることが挙げられている。看護の共通技術である「看護過程」は看護実践における基盤となる思考過程であり、この過程を段階的かつ継続的に学習することが求められている。そこで、実践的な学習活動に近づけるために事例を取り上げて学習する中で、統一した評価を行うことができるようにパフォーマンス課題を位置付け、その評価の在り方を考察した。生徒は個人で課題を作成し、グループ協議で課題修正を行い、成果を発表するという一連の授業実践を行った。パフォーマンス課題における評価については、共通の評価基準と各領域の評価の視点に分けて考えることで他の事例でも応用できる評価となり、有用性について実感することができた。また、評価基準が明確になったことで教員間での共通認識ができ、評価の視点のずれはほとんどなく、評価基準は妥当であったと考える。グループワークではロイロノート・スクール(株式会社LoiLo、以下「ロイロノート」と表記)を活用したことで、個人の課題を事前に共有することができ、グループでの話し合いが円滑になった。また、タブレット端末を用いることですぐにインターネットによる調べ学習ができ、その内容を考察に活用しているグループや課題発表時に動画や写真を用いた工夫をするグループの姿があった。促されることなく生徒が自ら取り組む姿があり、課題をよりよいものにしたという意欲が感じられ、パフォーマンス課題の実施は主体的な学びとしての効果があったと考える。

### (4) 「こころとからだの理解」における指導方法と評価

未来の創り手となるために必要な資質・能力を確実に備えることが求められている急激な社会的変化の中で、知識を蓄えるだけでなく、知識を使って問題を解決する能力が重要と言われている。このことから、パフォーマンス課題への取組を通して、直面する課題に対し既習の知識を活用して協働的に問題を解決する力を身に付ける必要があると考えた。そこで、「アルツハイマー型認知症を患う利用者への支援方法を考えよう」というパフォーマンス課題を設定し、認知症への理解を深めるとともに、介護サービス利用者の全体像を捉えた支援内容を考える授業を行った。生徒一人一人が事例の利用者に関する調べ学習を行った後に、グループでの情報共有・検討をして発表するという流れである。利用者の情報はWordでまとめ、Teamsにアップロードして情報共有を図ることとした。グループはラン

ダムに編制し、Class Notebook を活用した協働的な学習を進める中で共感的姿勢を身に付けるとともに、自分の考えを発信して、よりよい支援内容を根拠とともに提案するように指導した。さらに、生徒一人一人が、グループワークや発表を通して改めて支援方法を考えることで、自らの考えを深化させることをねらいとした。本研究では、協働的な学びの実践が生徒の視野を広げることにつながり、福祉の見方・考え方を働かせる重要性に気付かせることができた。その一方で、学びを深める点においては課題が残るが、繰り返し実践することが有効であることや、個人内評価として生徒の学びの進捗状況に合わせて指導する重要性を実感できた。

## 5 研究のまとめと今後の課題

全ての教科においてICT機器を活用し、生徒の学習段階に応じた効果的な活用方法を検証した結果、ICT機器の活用は、主体的・対話的で深い学びの実現に有効であることが分かった。パフォーマンス課題については、1年生など低学年では、知識としては学習したものの理解が浅いため、教員の求めるレベルに到達できていないという課題が残った。そのため生徒に身に付けさせたい資質・能力を明確にし、教員がどのように働きかければ、求めるレベルに近づけることができるかを検討していった。今後は思考力、判断力、表現力等の育成とも併せながらスモールステップを踏み、単元の中盤から終末の時期に、これまで学習したことが生かせるパフォーマンス課題を設定する授業計画が必要であると考えられる。引き続き実践を積み重ね、研究をしていきたい。